

長野県立歴史館たより

2019 年 **春** 号 vol.98

特 集

2019年巡回展

長野県の考古学

―時代を映す”匠”の技―



歴史館は画期的な企画展を行います

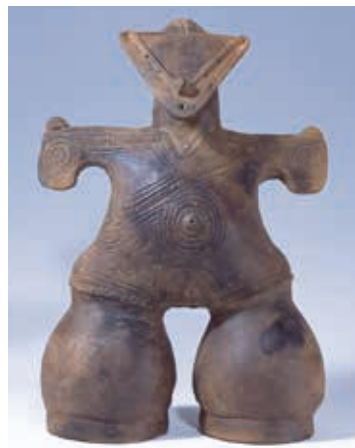
長野県立歴史館長 笹本正治

今年は長野県立歴史館ができて25周年の節目に当たります。私たちは前を向いてさらに進み続けます。皆様に愛されて四半世紀ということで、感謝の意味をこめて特別な企画展示を考えています。

第一弾は7月6日(土)からの館蔵品展です。歴史館の開館から現在に至るまで、歴史館では様々な資料を収集してきましたが、それを一堂に会して皆様に見ていただく機会はありませんでした。この展示で私たちがこの間に収蔵した、県民のお宝に接して下さい。

第二弾は9月7日(土)からの秋季企画展です。この企画展では中世に信濃の守護となり、近世にも大名として信濃に大きな影響を与えた、小笠原氏の展示をおこないます。新たに当館で購入した古文書をはじめ、これまで例がないくらい小笠原関係の古文書などを集めます。信州の歴史に大きな役割を果たした小笠原氏について考える機会になれば幸いです。

第三弾の10月26日(土)から始まる土偶展は、前期と後期に分かれます。前期展では国宝土偶5点が勢揃いします。長野県には茅野市尖石縄文考古館が所蔵する「縄文のビーナス」と「仮面の女神」の、国宝土偶が2点あります。縄文時代において現在の長野県地域は日本を代表する文化の花開いた地でした。長野県の皆様に喜んでいただ



仮面の女神
茅野市尖石縄文考古館蔵・写真提供

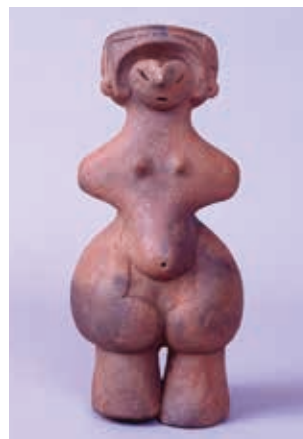
るように、国宝土偶5点が長野県立歴史館で勢揃いしてもらう予定です。これまで国宝土偶を一つの会場で多く見ることができた展示には、イギリス・大英博物館で、2009年9月10日(木)

から11月22日(日)に開催された文化庁海外展「THE POWER OF DOGU」がありましたが、当時国宝に指定されていた土偶は3点でした(後の国宝も展示されていました)。それらが帰国しておこなわれたのが、

2009年12月15日(火)から2010年2月21日(日)に東京国立博物館(東京・上野)で開催された「国宝 土偶展」でした。2018年7月3日(火)から9月2日(日)まで同館で行われ、大変な評判を呼んだ「縄文 1万年の美の鼓動」では国宝土偶5点が全てそろいました。この展示をフランス・パリに運び日本文化会館において、10月17日(水)から12月8日(土)にかけて「ジャポニスム2018」が開催されました。国宝土偶5点が一堂に会することがいかに凄いか、これでおわかりいただけると思いますが、このような特別な展示会を実現させます。

国宝土偶が生まれた背後には広範な縄文文化がありました。昨年、長野県は山梨県とともに申請した「星降る中部高地の縄文世界—数千年を遡る黒曜石鉾山と縄文人に出会う旅—」が日本遺産となりましたが、両県の土偶は国宝でなくても天下一品といえるものがたくさんあります。国宝を見て目を肥やした上で、長野県の土偶文化がいかにすごいか、後期展の長野・山梨の土偶できっとご理解いただけると思います。

このように来年度は、長野県立歴史館にとって記念になる、県民の皆様からよくやっていると評価をうけるような展示をおこないます。こうした展示が成功するためにも、ぜひ皆様の引き続きのご支援とご協力をお願いいたします。



縄文のビーナス

茅野市尖石縄文考古館蔵・写真提供

黒曜石・歴史遺産 世界からの眼 子どもたちからの眼

「最古の信州ブランド黒曜石」は11月25日(日)をもって終了しました。会期62日、観覧者は8,848名と県内外たくさんの方にご覧いただくことができました。会期中に行ったイベント2つについて振り返ります。

縄文人はなぜ鉾山を作ったか？

発掘調査によって確認された黒曜石の鉾山は今のところ国内には3ヶ所あり、さらに可能性のある場所もまだ何ヶ所かありそうですが、長野県以外では発見されていません。鉾山は、信州黒曜石原産地の特長なのでしょうか。世界的に新石器時代の鉾山遺跡は、数多く調査されています。その一つに、イギリスのグライムズ・グレイブズというフリントの鉾山遺跡があります。その遺跡に造詣が深い研究者で、日本の文化庁にあたるイングリッシュ・ヘリテージからピーター・トッピング氏をお招きして、「先史時代における採掘活動の社会的背景—グライムズ・グレイブズと英国の新石器フリント鉾山—」をご講演いただきました。

深い縦坑を掘り、フリントが豊富に採掘できる層に達すると横坑を掘っていく様子は大規模で黒曜石鉾山とはだいぶ様相が違ってきます。またグ

ライムズ・グレイブズでは、掘り出されたフリントで石斧を作っています。石斧は伐採具ですが、他方「権威を象徴する道具」として扱われることもあります。地表でも採取できるフリントをわざわざ鉾山として掘る時に儀礼的な運用がなされたのではないかと、地下を掘る採石行為にはただ単に石器の石材を得るというだけではなく先史時代人の世界観や社会的背景があると氏は推察しています。長野県でしか今のところ発見されない黒曜石鉾山、私たちは貴重な狩りの道具の材料を得るため、縄文人が地下へ働きかけたと考えていましたが、鉾山を運用するという行為に、もっと縄文人の世界観や、社会的背景を考えていかなければならないという、示唆に富む講演となりました。

次世代を担う子どもたちのサミット

長和町が行う国際交流支援事業の全面的な協力を得て、長和町の招待する英国の子どもたちを交え、「国際交流子どもサミット」を行いました。日英両国の子どもたちが博物館や学校の授業などで取り組んでいる歴史遺産の保存・活用に対する取り組みを紹介し、ふるさとの歴史遺産の未来や抱負について意見交換をおこないました。

「遺跡を守るのに重要なことは？」という問いに対して、英国の子どもは「Fall in love with history＝歴史に恋すること」と語りました。シンプルな答えですが、なかなか表現できるのではなく、会場の大人たちも感心させられました。

黒曜石鉾山を世界的視野で見ていくことの必要性、歴史遺産の保存や活用は広い世代で考えて行かなくてはならないことなど、黒曜石を通して新たな視野から調査や研究を進めていくヒントがたくさん得られました。

(大竹 憲昭)



ディスカッションする日英両国の子どもたち

2019 年巡回展

2019.3.16(土)～2019.6.23(日)

長野県の考古学 -時代を映す“匠”の技-

時代が生んだ“匠”

長野県の旧石器時代から縄文時代への移行期（約18,000年～約15,000年前）には、狩りの道具として用いられた石器の大きな技術革新が見られました。

これは、日本列島の人々が生きていくために生み出したいわば“匠”の技でした。この頃には以後の食文化に大きな変革をもたらした土器（鍋）が登場します。土器の使用によって食べられるものが飛躍的に増え、現在の煮込み料理のように複数の食材のうま味が調和し、加熱することでより衛生的な食事が始まりました。現代の食生活につながる原点をたどるとこの頃まで遡ると考えられます。

今回の巡回展では旧石器時代から縄文時代への移行期を中心として、生きるために必要として、磨かれていった“匠”の技を土器・石器を通してご覧いただき、モノの大切さをくみとれる展示をします。

石器をつくる匠…槍先形尖頭器

槍先形尖頭器（石槍）製作で卓越した技術を駆使していた様子が、佐久市下茂内遺跡の八風山産出の無斑晶質安山岩でつくられた10万点におよぶ出土品と多くの接合資料からわかります。

接合資料の中には重さ30kg程もあるとても大きな石を分割した、全国的にも最大級の接合資料があります。どのようにして分割したのかは未解明です。

槍先形尖頭器づくりのために用意された素材は、両面を100回以上も打ち欠きながら、その際の打撃に堪え抜いた結果、左右対称形に近い均整がとれた優美な形に整えられました。



写真1 長野県宝 下茂内遺跡接合資料（当館蔵）
（写真 岩宿博物館提供）

もともになる素材を打ち欠くだけで精巧な形にできる石器づくりの“匠”の技が見て取れます。

投げ槍から弓矢への変化と土器の出現



写真2 信濃町貫ノ木遺跡出土土器
（野尻湖ナウマンゾウ博物館蔵）

現在、長野県で最古の土器は、信濃町貫ノ木遺跡出土の隆起線文土器です。放射性炭素年代測定法で得られた結果を較正すると、今から15,720年前という結果が得られました。

土器の形状はボウル形で表面には、僅かに粘土を紐状に隆起させたシンプルな作りで、内面には炭化物が付着し、鍋の機能を持っていたことがわ

かります。

そもそも、土器の発明は、イギリスの考古学者G・チャイルドによって「おそらく土器の製作は、人類が化学変化を自覚して利用した最初のものである。」^(注1)と評されるほど、人類史上画期的な出来事だったのです。

この頃になると、石器づくりは、素材を打ち欠くのみで製作する技法から、ある程度整えた形状の石器の縁辺に先の尖った道具を押し当てながら剥ぐ、押圧剥離（プレッシャー・フレイキング）という技法をあきらかに用いるようになります。

弓矢の先となる石鏃（矢じり）は、この技法が駆使された“匠”の技です。

土器づくりの匠の飛躍 ー縄文芸術の胎動ー



写真3 富士見町日向遺跡出土土器（井戸尻考古館蔵）

縄文時代前期になると、土器の装飾性に拍車がかかってきます。今回の展示の松原遺跡と日向遺跡の土器は、縄文土器に施文する工具の特性を駆使し、レリーフ的な要素も盛り込むなどした、縄文時代前期末～中期初頭の縄文芸術の胎動とも言える逸品です。

今回の長野県の考古学の展示から

2018（平成30）年に長野県宝「信州の特色ある縄文土器」として新指定された縄文時代中期の



写真4 長野市松原遺跡出土土器（当館蔵）

土器の一部および同年日本遺産「星降る中部高地の縄文世界ー数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に出会う旅ー」に認定され、その構成遺産となった黒曜石原産地遺跡出土資料と、長野県埋蔵文化財センターの発掘調査遺跡成果を展示します。



写真5 長野県宝 岡谷市花上寺遺跡出土土器（市立岡谷美術考古館蔵）

長野県立歴史館、塩尻市立平出博物館、飯田市美術博物館で、巡回展示を行い、同時にミニシンポジウムを企画しています。この機会に、是非時代を映す“匠”の技に出会って、現代の生活にもとめられる原点を探っていただければと思います。

注1：G・チャイルド著 ねず・まさし訳『文明の起源（上）
〔改訂版〕岩波新書 p149

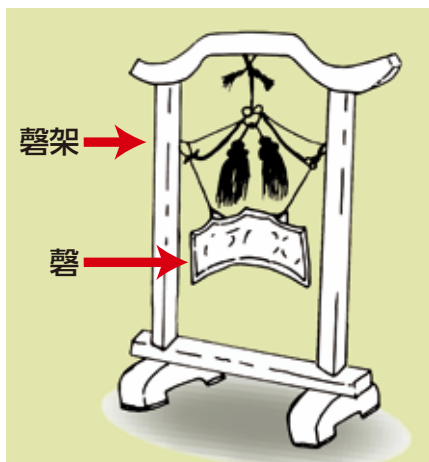
（近藤 尚義）



長野県内出土の磬

◆ 磬について

磬とは、中国発祥の打楽器で、磬架に吊るして撥で中央を叩いて音を出します。正倉院に磬が伝わっていることから、奈良時代には日本で使用されていたと考えられています。形はへの字形・山形が一般的で、材質は銅か鉄、文様は、唐草文や



鳥が多く、仏教に取り入れられました。では、長野県内出土の磬には、どのようなものがあるのでしょうか。

◆ 長野県内出土の磬

当館常設展示室に、松本市宮湊出土の蝶形磬があります。鋳銅製で、表面には唐草文と七曜文、裏面には蝶が鋳出されています。実物は重要文化財で東京国立博物館に収蔵されています。長野県から特異な形態の磬が出土した貴重な証拠として、当館では複製品を展示しています。蝶形磬は、高野山親王院（和歌山県）伝世品と宮湊出土品の2点しか現存しないからです。

県内からは他に、銅磬2点と鉄磬3点が出土しています（への字形、山形）。銅磬は、上田市法楽寺遺跡（平安後期：12世紀後半）と松本市新

村旧専称寺跡（鎌倉時代）から、鉄磬は松本市牛伏寺旧跡の蓬堂跡（平安後期）、阿南町早稲田遺跡（室町時代）、佐久市尾垂遺跡からで、いずれの遺跡も信仰に関係した可能性が高いと考えられています。県外では鉄製と銅製の磬が、寺院跡、経塚などを中心に出土しており、県内でも同様の傾向が見られます。

◆ 磬を読む

磬の材質と文様に着目すると、同時代の鏡と類似しているため、工人は同一である可能性が高いと推測されてきました。例えば、上田市法楽寺遺跡出土の銅磬と埴科郡坂城町北日名経塚出土の銅鏡は、文様の中に横向き蝶があり、制作年代も12世紀後半であるという共通点があります（注1）。しかし、唯一、磬の鋳型が出土した長野市松代町松原遺跡からは鏡の鋳型は出土していません。このことから、鏡の工人が磬を作ったと結論を出すまでには、更なる調査研究の蓄積が必要です。

◆ 終わりに

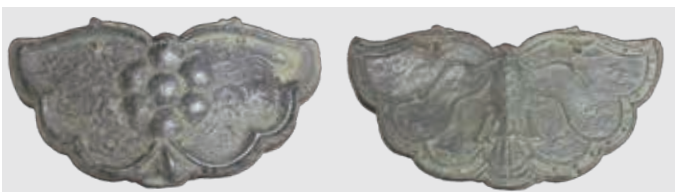
磬の出土自体は全国的にも珍しく、特に鉄磬は希少です。このため、県内から鉄磬3点が出土していることは、特筆に値します。製作年代は、東日本での鉄仏の流行最盛期（鎌倉時代）の前後に当たります。鉄仏の流行は、東国武士が鉄を重要視したためであると言われていますが、磬と鉄との因果関係は解明されていません。

形態、文様、材質等の謎が多い資料です。

注1：上田市教育委員会 2004『上田市文化財調査報告書第95集 法楽寺遺跡』第1分冊

参考文献：蔵田 蔵 編「法具」1967『日本の美術』16 仏具至文堂

図版出典：藤原直人2017「珍しきもの 磬」『信州の遺跡』11 長野県埋蔵文化財センター p7



宮湊出土蝶形磬（当館複製品 幅30.2cm）

（塚崎 敦子）



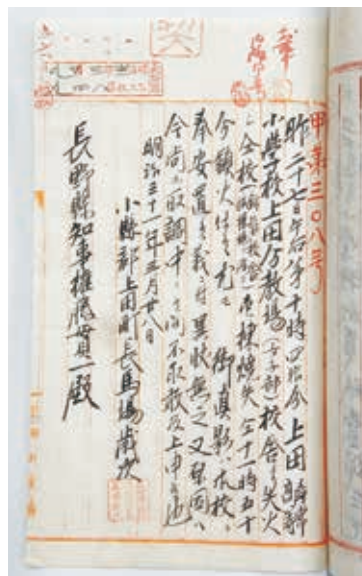
「御真影焼失説」の 真相を究明する

「御真影」とは、戦前に即位した天皇の御肖像を表徴とし下賜された写真のこと。大正時代初頭の調べによれば、長野県内小学校の6割に拝戴されています。教育現場では、聖旨徹底を強いられる過程の中で、悲劇も起きました。県下で、尋常科の卒業証書授与式を無事終え、翌日に高等科の卒業式を控えた1898（明治31）年3月27日夜、上田町立上田尋常高等小学校の分教場・女子部（上田女子校）校舎が焼失しました。この火災により明治天皇の御真影を喪失させた責任をとり、校長の久米由太郎は、その三日後に自刃します。

戦前、このことを題材にした私小説「父の死」を、小説家の久米正雄（久米由太郎校長の二男）が『新思潮』（大正5年）に発表したことにより広く知られ、美談の主人公として利用されました。

しかし、その殉職に至る要因は、教育史研究家の岩本 努 著『御真影』に殉じた教師たち』（大月書店 1989）の考証により否定されて久しく、これまで再検証もされていませんでした。

岩本 努氏の考証以降、御真影拝戴に関する研究書籍や論文等においては、『長野県教育史』史料編ほか（長野県教育史刊行会1973）や、『長野県



上田分教場焼失届（当館蔵）

政治』政治、教育・生活（長野県1972）等、長野県関連で県修史の引用に形跡を見ます。しかし、筆者が調べた限りでは、その原本に当たる館蔵行政文書や現用文書類を基に分析する文書、文献や論文は認められていません。



久米由太郎画像
（『教育功労者列伝』より転載）

このため、館蔵行政文書からどのようなことが読み取れるのか調べることにしました。

すると、明治26年10月20日付、小県郡長より長野県知事宛の皇后陛下御写真下付申請書に、下賜「御真影奉置室」を記した「上田尋常小学校略図」が添付されていたのです。この略図は、本校と分教場のどちらかということになります。

その結論は、残された双方の校舎平面図との比較から明らかにすることができました。また、一件文書に、上田分教場・女子部校舎が焼失した翌日に、上田町長から県知事宛に提出された「上田尋常高等小学校上田分教場焼失届」の存在を認めました。ここには、「昨二十七日午後第十時四拾分上田尋常高等小学校上田分教場（女子部）校舎ヨリ失火シ同校（新築校舎体操場ヲ除ク）壹棟焼失同十一時五十分鎮火仕候尤モ 御真影ハ本校ニ奉安置候義ニ付異状無之又原因ハ今尚御取調中二候間不取敢及上申候也」と記されていました。下賜された御真影は上田尋常高等小学校の本校（男子校舎）に拝戴されていたため、無事だったのです。

久米校長は自刃することにより、論断に至れない状況を作り出し、聖旨徹底下の異常な様を次々に問い続けさせようとしたのかもしれませんが。

2018年は、旧朝鮮京城府龍山元町公立小学校で奉護に斃れた鈴木志津衛（旧上田町出身）校長の没後100年、久米校長の没後120年でした。

なお、詳細については「御真影拝戴一件－聖旨徹底過程と行政文書－」（『長野県立歴史館研究紀要』第25号（2019年3月31日刊行予定）に掲載しますので、そちらをご覧ください。（伊藤 友久）

■2019年 3月～6月の行事予定

3月

休館日
4・11
18・22
25

巡回展

2019年巡回展 北信会場

「長野県の考古学
—時代を映す“匠”の技—」

3/16(土)～6/23(日)

■ミニシンポジウム

4/20(土) 13:30～15:00

テーマ:

土器の登場 旧石器時代
終末から縄文時代草創期
の文化

パネリスト：当館職員 ほか

講座・イベント

信州学出前講座in松本
(松本市立博物館)

3/2(土) 13:30～15:20
「河童が登場するまで
—人と水の関係史—」(寺内隆夫)
「日本人の心に生きる『河童』」
(溝口俊一)

県立歴史館の信州学講座

第9回 3/9(土) 13:30～15:10
「旧石器時代の信州」(大竹憲昭)

信州学出前講座in飯田
(飯田市美術博物館)

3/10(日) 13:30～15:10
「田中芳男—博物館の父は飯田から
羽ばたいた—」
(青木隆幸氏
飯田OIDE長姫高等学校)

4月

休館日
1・8
15・22

5月

休館日
7・13
20・27

6月

休館日
3・10
17・24



長野県宝
佐久市下茂内遺跡出土 槍先形尖頭器
(当館蔵、写真提供 岩宿博物館)



飯田市美女遺跡出土 押型文土器
(飯田市教育委員会蔵)



歴史館でこどもの日

5/5(日・祝) まが玉作り・プラ板製作 等

各講座等の日程概要

5/18(土) 県立歴史館の信州学講座 1

古文書講座(上級1)

5/25(土) 考古学講座 1

6/1(土) 古文書講座(中級A1)

6/2(日) 古文書講座(初級A1)

6/8(土) 県立歴史館の信州学講座 2

6/13(木) 古文書講座(初級B1)

古文書講座(中級B1)

6/15(土) 古文書講座(上級2)

6/16(日) 考古学セミナー

行事アルバム

秋季企画展関連行事



10月20(日)、秋季企画展の国際交流子どもサミット開催日の午前中、ワークショップがおこなわれました。イギリスの子どもたちによる、フリント石器づくりを通して、ここでも日英の子どもたちの交流が図れました。

県立歴史館の信州学講座



12月1(日)の県立歴史館の信州学講座は、長野県教育委員会の櫻井綾乃氏をお迎えし、ターナーの描くイギリス風景画の魅力を中心にお話いただきました。東御市出身の丸山晚霞の風景画との関係については、当館の林誠専門幹・学芸員とのコラボレーションもあり、来場者から「歴史館で美術の話が聞けて良かった」といった感想をいただきました。

県立歴史館・長野都市ガスの日



12月15(日)、長野都市ガス株式会社様の協賛により企業パートナーの日を開催しました。当日は入館料が無料で冬季展「自然を見つめた田淵行男」のオープニングセレモニー、飯島家武家史料の特別公開、バックヤード探検、赤外線透視などのイベントをおこない、好評でした。

表紙の写真の解説

長野県宝 佐久市下茂内遺跡出土 槍先形尖頭器

(当館蔵、写真提供 岩宿博物館)

下茂内遺跡は、浅間火山起源の大窪沢第2降下軽石(今から16,000年前頃)の上下で見つかった、佐久市八風山で産出する無斑晶質安山岩を素材とした槍先形尖頭器製作跡です。左は、縁辺に細かい刃部が施されている完成品で、右側は完成に極めて近い未完成品で、上部で折れています。(左：長さ12.4cm)

長野県立歴史館たより 春号 vol.98

2019(平成31)年2月20日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: http://www.npmh.net/

印刷 奥山印刷工業株式会社